【プロメテウス】人類に火を与えたギリシャ神話の神族

プロメテウスの罠 1472

土よ 10

農地に邪魔な汚染物

福島県飯舘村で、菅野宗夫(64)と同じように、独自の除染を試してきた菅野啓一(61)。

原発事故後、地元の区長だった啓一は、菅野義人(63)と2人で地区内の約80戸を回り、線量を測った。

義人は、長年地域づくりをともにやってきた仲間だ。

地区では「三匹獅子舞」という民俗芸能が受け継がれてきた。

天明の飢饉では人口が激減した。

太平洋から内陸へ塩を運んだ「塩の道」が通っていた……。

そういった歴史を調べ、一緒に地域史をまとめたこともある。

避難後も、地区をパトロールしながら、ほかの住民もまじえて交代で地区内の線量を測り続けている。

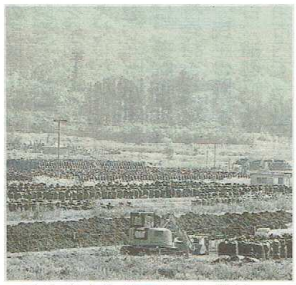
「この地域は、まだまだ捨てたもんじゃねえ」と啓一は思う。

国による住宅周りの除染が今年、一通り終わったことを受けて、啓一は再び地区内の線量を測った。

原付きバイクを中古で買い、荷台にGPS機能つきの線量計を積んで一戸ずつ測って回った。

自宅のリフォームも始めた。

今は福島市に避難しているが、いずれ帰村してトルコギキョウの栽培を再開するつもりだ。


除染廃棄物が置かれた農地

寒暖差が花の色を鮮やかにする。うんと、きれいな花を咲かせてやろうと思う。

コメや野菜の出荷再開には10年はかかると覚悟する。出荷して、もし基準を超える放射性セシウムが検出されたら、痛手は計り知れない。

そのためにも、線量を下げる努力を続け、測り続ける。第3種放射線取扱主任者の資格も取得した。

「ここまでやったと、次の世代に渡すのは俺らの仕事」

花栽培を再開したら、多くの人に見に来てもらう、そんなことも夢見ている。

「ただ、汚染物が邪魔になる」

啓一が言う汚染物は、国の除染で出た汚染土などの黒い袋。地区の中心部に広がる、日当たりの良い農地に山積みにされている。

中間貯蔵施設に運ぶまでの「仮仮置き場」という位置づけだ。

本来なら「仮置き場」に置く予定だったが、村が提案した山間部は造成に時間がかかる。除染を急ぐため環境省が「平らな所」を求めた。

村内には、そんな「仮仮置き場」が行政区ごとにある。ほとんどが、広くて条件のいい農地だ。

ボランティアたちが除染して稲を育てる田んぼも、周辺は「仮仮置き場」になる予定だ。

(清野有希子)

【プロメテウス】人類に火を与えたギリシャ神話の神族

プロメテウスの罠 1473

土よ 11

田が冠水 濃度は

1時間に59ミリ。

今年9月10日夜、福島県飯舘村。

菅野宗夫(64)の自宅屋根に取り付けてある雨量計が、すさまじい豪雨を記録していた。

翌日、避難先から駆け付けた菅野は、自宅まで車で入れなかった。あふれた川の水圧でアスファルトがめくれ、道路が陥没していた。玄関も約10センチ浸水し、泥だらけだった。

ボランティアや研究者ら「ふくしま再生の会」のメンバーたちと独自に除染し、稲を育てていた田んぼも一変していた。

川の水と一緒に土砂や木片が流れ込み、穂をつけた青い稲が半分ほどなぎ倒されていた。

「でも、貴重なデータだ」

菅野は悲観していなかった。

川の上流は除染されていない山林。豪雨が地表を流したはずだった。その水が、田んぼの土やコメにどう影響するか――。

その対策を考える、またとない機会だと思った。

そのためにも、収穫にこぎつける必要があった。まず始めたのは田んぼを囲む電気柵の復旧。サルやイノシシに荒らされるのを防ぐためだ。

倒れた支柱を土砂の中から掘り起こし、ネットに絡みついた木の根やごみを取り除きながら張り直す。

川から大量の砂が流れ込んだ

根気のいる作業だったが、ボランティアのおかげで2日で終わった。

2カ月後、東大の施設に依頼していた田んぼの土の測定結果が菅野のもとに届いた。

川からの土砂がたまっていた所で土を抜き取り、深さごとの放射性セシウムの濃度を測ったものだ。

興味深い変化があった。

浅いところにある粗い砂状の部分より、その下の細かい泥状の部分のほうが濃度が高くなっていた。

1キログラムあたり5千ベクレルを超え、冠水前の3千～4千ベクレルよりも高くなっていた。

菅野たちの推測はこうだ。

冠水が2回に分けてあり、1回目は比較的濃度の高い泥、2回目は比較的低い砂が流れてきた。田んぼは二つの川の合流地点にあり、それが冠水をもたらしたのではないか。

豪雨後、除染で出た汚染土などを入れた袋が川に流されていたこともわかった。川沿いの農地に一時的に置かれていたもので、一部は中身が流れ出ていた。

農業再開に向けて不安は尽きないが、データの分析を続けて次の手を打つ。菅野たちはそう考えている。

(清野有希子)

【プロメテウス】人類に火を与えたギリシャ神話の神族

プロメテウスの罠 1474

土よ 12

サークル「までい」

福島県飯舘村で独自に除染し、稲を育てていた菅野宗夫(64)。その田んぼに9月、豪雨であふれた川の水や土砂が流れ込んだ。

川の上流は除染していない山。田んぼの土にどう影響しているか。調べるため、とくに被害が大きかった場所で深さ約20センチの土を抜き取り、東大に送った。

菅野がボランティアや研究者らとつくる「ふくしま再生の会」は、村で採取した土や植物などにどれぐらい放射性物質が含まれているか、東大農学部の放射性同位元素施設で測定してもらっている。

東大で、送られてきた土を専用容器に詰め替えたり、重さを量ったりする作業は、農学部の事務職員らが勤務とは別に取り組んでいる。

そのためにサークルまで設け、「までい」と名付けた。

「までい」とは飯舘の言葉で、丁寧に、心を込めてという意味だ。

農学生命科学研究科が村に研究協力することになり、2012年秋、東京にいながらでも協力しようと思った職員たちが結成した。

週1回、昼休みや夕方に作業する。教員やボランティアも加わり、入れ替わりで20人ほどが集まる。

「までい」で測定の準備をする

これまでに測定したものは1万を超える。アケビ、キノコ、柿……。イノシシの脚まであった。

10月6日。その「までい」に菅野の田んぼで採った土が届いた。

「わあ、砂だね」

定年後も非常勤で職員を続ける斎藤富子(67)が言った。サークルの世話役を務めている。

田んぼの土は、直径5センチの円筒状のプラスチックケースに入っている。深さごとの数値を出すため、ようかんを切るように土を2センチずつ輪切りにして、20ミリリットル入りの容器に入れた。

どこの、深さ何センチの土か、番号をつけて管理する。測定が済んだら、飯舘村の活動拠点に戻す。

こうした一連の流れは、作業をやりながらマニュアル化してきた。

斎藤が再生の会と出会ったのは、震災があった11年の夏。知人を通じて「一度、飯舘に遊びに来なよ」と誘われた。

斎藤は「考えておきます」と答えたが、乗り気じゃなかった。

決して遊びに行くような所じゃない。むしろ、自分としては距離を置いていた。

ところが、その後、斎藤は、福島に対するそんなイメージを改めることになる。

(清野有希子)